

暗記してしまったという場合を除き、生まれて初めて目にした植物の名前がすぐにわかるはずがありません。わからないのは単純に個人の問題といえます。個人の問題であるならば、それは本人の経験と努力の結果であって、足りない知識を徐々に積み重ねてゆくことで自然に解消されます。少しこれとは違いますが、種がたくさんあるので難しい場合があります。同じ属の中にたくさんの種があると、いきおい区別するための特徴の数も増えますし、また調べにくい特徴も使わなければならなくなります。たとえば花と実の両方がないと図鑑でも調べることができないヤナギ属が代表的な例でしょう。顕微鏡の下でしか見ることでできない細かい違いが重要な場合も、これに準ずるかもしれません。コケ植物ではミズゴケ属がこれにあたります。ミズゴケの仲間であることはすぐ誰にでもわかるのですが、その先にはなかなか進むことができません。ミズゴケの専門家は野外で生えている姿を見ただけで正確に名前を言い当てることができるのですが、この仲間を調べるときにいつも手こずっている私には驚愕すべき特殊能力です。これも慣れの問題なのでしょう。研究が遅れていて分類があまり進んでいないことが、名前がわからない理由の場合もあります。図鑑や専門の論文を参考にしても、はっきりとしたことが書かれていないので誰にもわからないのです。これは分類学者という職業についているものにとっては、ある意味で責任問題という側面もあり、なるべく触れたくないとこです。蘚類のハリガネゴケ科とアオギヌゴケ科は、たくさんあ

る同定の難しいコケ植物の中でも嫌がられる双壁（たまげ）でしょう。試しに専門家にこれらの仲間を見せて同定を依頼してみるとよくわかります。きっと属までの鑑定結果が返ってくることでしょう。そのほかごく稀な場合として、帰化植物の同定に手こずることもあるかもしれません。帰化植物は普通の図鑑にはほとんど掲載されていませんから、ずいぶんと悩むことになりやすいのです。現代では帰化植物がすでに数百種以上も日本各地から知られていますし、園芸や緑化のために国外から持ち込まれるものは年々増加する一方です。見慣れない植物をよく調べてみたら最近やって来た帰化植物だった、という可能性も実はそんなに低くはないようです。

同定ができない理由の二番目は、たまたま手にとった植物が、運の悪いことに何らかの原因で十分にその種の特徴を表していないことが原因の場合です。私が小学生のときの理科の授業で、各自それぞれが種籾（たねまき）から稲を育てたことがあります。当時住んでいた団地のベランダにバケツを置いて、その中で育てたのですが、育った稲からは牛乳瓶一本分ほどの米が収穫できました。いく粒かの種子は収穫前にベランダから下の地面にこぼれ落ちたようで、翌年になって乾いた地面から雑草と一緒に稲が芽を出しました。しかしこの稲は、わずか七八センチメートルほどの大きさにしか育たず、秋になってわずか一〇粒ほどの実を結んだのです。ゆうに数十センチメートルには達する通常の稲に比べると、まるで赤ん坊のような姿

でした。養分の少ない乾いた地面で育つたため十分に成長できず矮性となった、いわば盆栽の稲です。

植物はこのように生育条件が劣悪であると、それに合わせて体の大きさや形を変えてなんとか実を結ぶまでに成長する力を備えています。これを難しい言葉で「表現型可塑性カクセイ」といいます。発生初期の段階で器官のほぼすべてが完成する動物と違い、植物では茎の先端などで生涯にわたって器官の発生が継続しますから、そのときどきの周囲の環境に合わせて体の大きさなどを加減する芸当が可能なのです。名前を調べようとあなたが手に取った個体が、この可塑性ゆえに通常の形をしていなかったとしたら、図鑑を調べてもよくわからないことになるわけです。たくさんの個体を見て経験を積み、変異の幅を把握することによって、この問題はある程度解決できます（これも分類学研究の本質の一つですが、このような研究をおこなうには、日本国内だけではなく世界各地の標本館に保管されている標本を借用して調べなければなりません。その数は何百点、ときには数千点にのぼることもあります。たとえばいま仮に一〇〇点の標本を調べたとすると、その中には必ずといっていいほど、一、二点はどうにも扱いに困るのが混じっているのですが、経験を積むことによって感わされなくなるわけです。なかには病気などによって奇形になり、通常の形から著しく変化いちじくしてしまうことさえあるかもしれません。私たちが頼りにする図鑑も変異の幅を考慮して書かれてはいますが、それは

通常の変異の範囲のことであり、あまりに極端なものについては触れられていないのが普通です。

三番目の原因は、植物が示す生物としての本質と、対象を認識する人間の作業との間に生じる、ずれに由来します。生物の種は時間の経過とともに進化を遂げ、形や性質が変化してゆきます。その結果、ある一つの種から別の種が生じたり、あるいは単一の種が二つの種に分かれたりするのです（自然界の中では少なくとも何万年という時間の単位で進化が進行しますから、実際には変わりがゆく現場を直接見た人はいません。しかし、化石というしつかりした証拠がありますし、なによりも現在の地球上にみられる膨大な生物の種数と、それぞれの生育環境に見事に適応した形態と生き方を考慮するならば、何億年という時間の経過の中で生物が進化し多様化してきたと考えざるをえません）。そうすると、母種（元になる、ある特定の種）が二つ以上の娘種に分岐してから十分時間が経っているのであれば、娘種どしは違う進化の道筋を歩んだ結果、いろいろな面で異質なものになっているはずで、たとえばそれが形態での違いとして反映されているのだとしたら、私たち人間がこれを区別することは容易であると考えられます。ところが、分岐した直後、あるいはいままさに二つに分かれつつある歴史的瞬間を私たちが目撃しているのだとしたら、二つの娘種の境界はあまり明確ではないかもしれませぬ。これは頭の中で考えた屁理屈などではなく、イネ科やラン科、あるいはキク科など多数の種を含

んでいる仲間では実際に私たちの目の前で現実を起こっていることです。もちろんコケ植物にもこれに相当する例があります。第一番目の原因の中で取り上げた、研究のあまり進んでいない群というのは、実はいま盛んに種分化を起こしつつある群である場合がほとんどで、このような分類群ではそれぞれの種と種の間の境界があまり明瞭めいりょうではなく、そのことこそが分類学的研究が進展しない原因になっているのです。アオギヌゴケ属やハリガネゴケ属というのはまさにそんな分類群で、誰が分類を試みても難しくなかなかすっきりした結論が出せないのです。

また植物の中には、有性生殖を捨ててしまい、通常とは異なる方法でのみ繁殖するものがあります（無配生殖や無融合生殖と呼ばれているのですが、ここでは詳しく触れません。興味のある方は専門書を参照してください）。そんな増え方をしていると、遺伝的には親と同じ子供ばかりが生まれてきますから、もしも突然変異によって新しい性質が生じた場合、次世代の集団の中で容易に固定され、隣の集団とは（同種でありながらも）違う性質を持つようになります。極端な場合、地域ごとに少しずつ形が違うものが多数生じ、なにがなにやらよくわからないという事態になるのです。良い例が高等植物のヤブマオ属やテンナンショウ属です。コケ植物では自然の中で無配生殖や無融合生殖が確認された例はあまりありませんので、もっぱら無性芽だけで繁殖している種類がこれに相当します。ただしコケ植物は小さいので、

形の違ひは見過ごされ、結果として過小評価されがちですから、あまり問題にならないのかもしれない。

すべての場合ではありませんが、多数の種が含まれている分類群では一般に同定がとても困難です。同じものを鑑定しても専門家によって意見が異なり、違ふ名前がつけられることも稀ではありません。つまり、私たちが同定できないということの背景には、人間がおこなう鑑別という作業と生物の種の現れ方との間に不一致が存在し、少し大げさな言い方をすれば、形態という指標で識別される種、言い換えれば「人間が定義した単位としての種」というものが必然的に背負っている限界がそこに現れているのです。胸を張って「同定できません」と宣言しても誰にも文句のつけようはないのでしようが、それではあまり生産的とはいえません。「種とは何か」を深く理解する良い機会と考えてみれば、同定できないことこそが、分類学の醍醐味なのだといえるのでしよう。

第2章 おそるべき環境適応能力

コケ植物の体が小さいことは、生育環境への適応を考える際のキーワードになります。前章の「陸上植物の起源の謎」でも触れたように、体が小さいことには、彼らがこれまでになどってきた進化の歴史が如実^{じゆじつ}に反映されているからです。水中を泳ぐ精子を持つことや、体を支え体内で水を運ぶ通道のための器官（維管束^{いかんそく}）を持たないことなど、コケ植物の進化の歴史に由来する制約があるためにコケ植物の体は大きくなれなかったのですが、だからといって衰えゆく生物だと決めつけることはできません。それを逆手にとり、さまざまな工夫を凝らしながら、他の植物が入り込めない場所でがんばって生きています。それどころか、コケ植物が栄えるうえで、体が大きくなる必要などなかったのかもしれないかもしれません。この章では

彼らの適応能力に注目して、たくましく生きている姿を見てゆくことにしましょう。

極寒の極地から熱帯雨林まで

苔のことが気になり始めると、できるだけ多くの種類を自分の目で見たくなります。とはいふものの、経験がなければどこに行けば苔に会えるのかなかないか思いつかないものです。だからでしょうか、「どこに行けば苔を見られますか」とせつば詰まった雰囲気の質問を受けることがあります。そんなときには、初めて恋人ができたときのことを思い出してみてください。世の中にこれほど多くの喫茶店や映画館など、二人で行く場所があることに、相手ができて初めて気づかれたのではないのでしょうか。あるいは植物にとっても詳しい人と一緒に野山に出かけたときのことを考えてみてください。あれよあれよという間に、いくつも花を見つけたしてくるのに驚かれたのではありませんか。同じ場所を歩いているのですから、確かにあなたの目にも同じ花の姿が映っていたはずなのですが、あなたは気づかなかったのです。苔も同じです。網膜（まなま）には苔の姿がちゃんと映っていたのに脳にはその信号が届いていなかったわけです。これがいわゆる「目がトロい」ということで、見えているのに見えなかったのです。でもいったん気になりだしたからには、これからは至るところに苔の姿に気づく

はずです。公園の木の幹や根元、花壇の植え込みの間、コンクリートの側溝の隙間、あるいは歩道橋の階段の端など、都心であっても探せば必ず苔は見つかります。身近にある苔に初めて気がつく、その感動を上手に表現した『ここにも、こけが……』という題名の写真絵本（『たくさんのふしぎ』二〇〇一年六月号、福音館書店）があるくらいです。

ではもっと視野を広げ、自然界の中でコケ植物がどのような環境に生育しているのかを探ってみましょう。結論を先取りすると、氷河と海水中以外ならどこにでも苔を見つけることができます。大砂漠の真ん中ではさすがに生きてゆけません、海岸沿いの砂丘ならば半ば砂に埋まりながらも生きているのを見ることが出来ます。海水中はだめでも、しぶきのかかる岩場では、鮮類せんるいのウシオギボウシゴケやイソペノオバナゴケのように、なんとか生きてゆける種類もあります。名前がいかにもそれらしく海辺を表しているのも愛嬌あいこうです。南極の大地にさえ、夏のあいだに雪が解けて露岩が表れる場所に限れば数種類のコケ植物がすで見つかっています。もちろんそういった環境に生える苔は多年草ですから、氷点下四〇度にもなる冬の凍えるような寒さやブリザードにも耐えて生きています。多数の茎がぎっしりと密生し背の低い半球状の群落をつくるのが、強風と低温に耐えられる秘訣ひけつです。南極からとはとても変わった生態を持つ苔も知られています。南極昭和基地の周辺には、冬は氷に閉ざされ夏のあいだだけ現れる池がいくつも知られています。池の深いところは一年中凍りませ

んから南極としてはとても暖かい場所になります。この池底を国立極地研究所の伊村智博士らが調査したところ、コケ植物が塔のような形の群落をつくっているのが発見されました。高いものでは六〇センチメートルに達する立派な姿になるのだそうです。この群落はその形にちなんで「コケ坊主」と呼ばれています。断面を切ってその成長速度を計算してみたところ一年にわずか〇・七ミリメートルで、高さ六〇センチメートルのコケ坊主ができるには約一〇〇〇年かかることがわかりました。このコケ坊主をつくっているのは藓類ナシゴケ属の一種らしいのですが、不思議なことに、この池底以外に南極周辺で同じ種類は見つかっていないそうです。たまたま南極にやって来たこの種にとって、池の底が避難所の役割を果たしていたのでしょうか。

ロシア極東地域に広がる針葉樹林帯、その林床も実はコケ植物で埋め尽くされています。実際に現地を調査をおこなった服部植物研究所の岩月善之助博士によれば、量こそ膨大なのですがいくら歩いても出会うのはタチハイゴケとイワダレゴケの二種ばかりで、種類の多様性はとても小さかったそうです。ともに日本の少し標高の高いところに行けば普通にある藓類です。規模はずっと小さいのですが、八ヶ岳の白駒池周辺でもこの二種が林床を一面に覆い尽くすように生えていますから、シベリアの大地の雰囲気味わうことができます。

熱帯ではどうでしょうか。標高が一五〇〇メートルから三〇〇〇メートルの山岳地は一年



図7 蘚苔林 マレーシア・ボルネオ島のクロッカー山脈

を通してよく雲の中に隠れています。その雲の中に入ってみると、一面の深いガス（霧）と霧雨。ここに発達するのが雲霧林うんむりんです。林床から林冠まであらゆる場所が蘚類や苔類たいるいで埋め尽くされていますので、蘚苔林せんたいりん（英語では mossy forest）とも呼ばれています。直径五、六

センチメートルの木の枝をすっぽりと包み込むように苔が生え、まるで太い枝のように見えます（図7）。あまりに旺盛おうせいに繁茂するため、重くなった苔の塊かたまりを枝が支えきれず、ついには枝が折れて苔と一緒に落下してしまいうほどです。そうやって落下したたくさん枝が林床には至るところに転がっていますので、苔を採集するにはとても好都合です。また蘚苔林では、生きている木の葉の上を住処すまかとする苔類クサリゴケ科が多様化し、ひじょうに多くの種類が知られています。このような特殊な生態を持つものを葉上着生種ようじょうせくせいしゆといいますが、いずれもが小さな植物体の裏側からネバネバする物質を出し、葉の表面にしっかりと付着しています。林床はさらに多くの苔に覆われ、厚く積み重なった多量の苔のために歩くとふか

ふかします。蘚苔林こそが、この地球上で最も苔がその存在感を示す場所だといえるでしょう。日本では屋久島やくしまに行けばその姿を見ることが出来ます。

熱帯林がすべてコケ植物の楽園かというところ、残念ながら違います。熱帯低地の広大な森は、何層にも重なって発達した林冠のために林床は本当に薄暗い状態になっています。このような場所には、少しの光でも生きてゆけるような少数のものを除き、ほとんどコケ植物は生えていません。それは見事なほどです。またアマゾン河流域のように、雨期に大規模な河川の氾濫はんらんが起こるようなところでは、体の小さなコケ植物は泥をかぶって光合成ができなくなるためにほとんど生えることができません。熱帯の低地は苔がほとんど生えていない「コケ砂漠」なのです。楽園と砂漠が同居する場所、それが熱帯だといえるでしょう。

日本で一番標高の高い富士山頂上はもちろんのこと、ヒマラヤの高所にも苔が生えています。私の経験では、四〇〇〇メートルを超えるボルネオ島最高峰キナバル山の山頂でもコケ植物に出会いました。白く輝く群落をつくる蘚類シモフリゴケ、そして同じく蘚類ギンゴケが高山帯に生きるコケ植物の代表です。なかでもギンゴケは、人家の周りにごく普通に見かけるもので、ときに盆栽の飾りにされることもある蘚類なのですが、その一方で南極でも見つかっています（口絵④）。さらに東大寺大仏殿改修時におこなわれた調査（一九七七）では、屋根の上に生えていたことが報告されています。夏には強烈な日差しにさらされ、ゆうに拱

氏五〇度は超える場所です。低地から高地、そして酷暑から極寒まで、これほどさまざまな場所に生きてゆける適応力のある植物は他にないでしょう。

乾燥に強いのもコケ植物の特徴です。護岸コンクリートの上や河原の大きな岩の上には薛類ギボウシゴケ属の仲間やハマキゴケなどがよく大きな群落をつくります。庭木の幹に張りつくように生きている苔類カラヤステゴケや、暖温帯の背の低い海岸林の木の幹に生えるクサリゴケ科の微小な苔類は、夏ほとんど雨が降らない時期にはからからに乾いた姿をさらしているのを見ることが出来ます。本章の「枯れても死なない」の節で詳しく触れますが、休眠することで彼らは強烈な乾燥に耐えているのです。しかしながら、長期間にわたってひどい乾燥が続く場所では、さすがの苔も生きてはいけません。日中はひどく乾燥している場所に見えても、河原や木の幹に降りるわずかな夜露を利用してその命をつないでいるのです。

隔離分布の不思議

さまざまな環境に生きるコケ植物ですが、それぞれの種が地球レベルでどのような場所に分布しているのかを眺めてみると、けっこうおもしろいことがわかります。

植物はある程度地理的にまとまった分布域を持っているのが普通です。というのも、時間

をかけて少しずつ分布する範囲を広げてゆくわけですから、その結果として分布域に地理的なまとまりができるのです。「分布はそれぞれの種の歴史を反映している」、これは植物地理学という学問において基本的な定理のようなものです。ところが、なかにはこの捉え方では理解できない分布を示すものがあります。つまり、徐々に分布域を広げていったと考えると、理屈に合わない分布がみられるのです。一番わかりやすいのは、たとえば北海道と四国、あるいは日本と北米東部といったように、地理的にひじょうに離れた場所に点々と分布している、その中間地域にまったく見つかからないような場合です。このような分布の仕方を「隔離分布」といいます。隔離分布には大きく分けて二つの型があります。一つは「長距離散布」によるもので、長い距離を種子や胞子が飛ばされ、新しい生育地が地理的に遠く離れた場所に確立される場合です。もう一つは、本来は広い範囲に分布していたものが、何百年、何千年という単位でくり返される寒冷化や温暖化などが原因で生育できる環境が分断され、各地に点々と取り残されてしまった場合です。後者の場合を特に「遺存的隔離分布」と呼ぶことができます。

実は、コケ植物にはアジアと中米だけから見つかっている苔類イイシバヤバネゴケや、東アジア・南米・アフリカ東部から報告のある蘚類シワナシチビイタチゴケ属のように、極端な隔離分布を持つ種が少なくありません。蘚類エビゴケ属も、東アジア、北米、メキシコ、



図8 ビルマで発見されたヒプロドントプシス属の新種

大西洋のマデイラ島、そしてインド洋のモリシヤス島というわけのわからない分布を示します。これらはほんの一例ですが、高等植物と比べてもコケ植物には隔離分布あるいは広域分布する種や属が多くみられます。なぜコケ植物にはこのような分布を示すものが多いのでしょうか。そこには二つの原因が考えられます。

第一の原因は、コケ植物は他の陸上植物に比べると体が小さくて目につきにくく、これまでの調査でうっかり見逃されている可能性が高いことです。ある場所に分布していないのではなく、そこにあるのだけども見つかっていないだけ、ということなのです。いわば見せかけの隔離分布です。より綿密な調査がおこなわれれば、連続的に分布していることがわかってくるはずです。たとえば、蘚類タチヒダゴケ科にキサゴケ属という、木の幹に生えるひじょうに微小な仲間があります。葉が舌状をしていることと、胞子体を支える莖柄が湿ると著しく螺旋状にねじれるのが特徴です。この属にはこれまで日本から一種、北米から一種の計二種だけが知られており、ひじょうに変わった分布を持つと考え

られてきました（そのほかにヨーロッパ産の琥珀中から、化石種が二種報告されています）。ところが、二〇〇二年（平成一四年）春に東京大学を中心に実施されたビルマ（ミャンマー）北西部ビクトリア山周辺の植物調査において新たに新種が発見・報告されました（図8）。ビルマはこれまでに知られている分布のちょうど中間にあたり、これまでの空白を埋めることになりました。コケ植物では珍しい化石種が二種も知られていることからわかるように、キサゴケ属はもともと北半球の温帯域に広く分布していたのでしょう。植物体がきわめて小さいことが、発見を遅らせたのだと思われれます。今後調査が進めば、ほかの場所からも発見される可能性が高いと考えられます。

隔離分布には当てはまりませんが、たとえば高等植物では別種として分けられるような場合でも、植物体が小さいために人の目にすぐわかるような違いが目立たず、そのため誤って同じ種として扱われている可能性もコケ植物では小さくないでしょう。遠く離れた場所に同じ種があると考えるよりも、近縁ではあってもそれぞれがすでに別種に種分化していると理解する方が理に適います。なぜならば、遠く離れた場所の間で遺伝的な交流があるとは考えられず、遺伝的交流がなければ別種へと分かれてゆくのが自然だからです。

二つ目の原因は、コケ植物は小さな胞子で繁殖することに由来します。胞子は種子に比べてとても小さく、風に乗って遠くに飛ばされやすく、地理的に遠く離れた場所に到達する

こと、つまり長距離散布が比較的容易に起こりやすいのです。コケ植物の植物体は小さいために胞子が詰まっている胞子囊（ほうし）は地上の低い位置にあります。通常の風くらいではそれほど胞子が高く舞い上がることはありませんが、台風などの強い風で舞い上げられ上昇気流に乗って思いがけないほど遠くまで飛ばされることもあるようなのです。高い木の幹に着生する種では、なおさら風に乗る機会が多いことでしょう。あるいは渡りをする水鳥の水かきに、泥と一緒に無性芽や植物体の一部がちぎれた断片が付着して、遠くまで運ばれることも考えられます。このようにコケ植物が長距離散布するさまざまな可能性があるのです。本当に胞子が長距離を飛散しているかどうか、まだ確実な証拠は見つかっていませんけれども、空气中に漂（たな）う胞子を調べた研究例では、少なくとも一〇〇〇キロメートル以上離れた場所には見つかっていない種の胞子が捉えられたという報告があります。オランダのコケ学者ファン・ザンテン (B. O. van Zanten) 博士は、長距離を飛散するために成層圏に達したコケ胞子とその環境でどれくらい生きてゆけるのか、実際に低温・低圧条件にさらして実験しましたが、調べた種の多くが生き残ったと報告しています。

隔離分布する種について、遠く離れた複数の場所からサンプルを採取し、どれほど遺伝的に離れているかを調べると、興味深いことがわかるはずで、離れた場所にある集団間では、遺伝的交流がすでに長期間にわたって途絶えている可能性があります。もしそうならば、各

集団は別の種へと進化してしまっているかもしれない（これを種分化といいます）。ナンジャモンジャゴケを材料にしてそのことを確かめてみました。ナンジャモンジャゴケ属は蘚類の中で最も原始的と考えられている仲間です。世界にナンジャモンジャゴケとヒマラヤナンジャモンジャゴケの二種のみが知られていて、おもに冷温帯から亜寒帯に分布しています。日本ではナンジャモンジャゴケだけがあり、日本アルプスの雪渓せうけいわきの大岩の間などで見ることができます。ナンジャモンジャゴケの分布域のほとんどは北半球高緯度地域なのですが、唯一の例外がボルネオ島キナバル山です。ボルネオ島は熱帯に位置しますが、ナンジャモンジャゴケが見つかったのは標高三〇〇〇メートルの場所で、日本でいえば冷温帯に相当します。日本とボルネオ島の産地は数千キロメートル離れていて、その中間の地域からは台湾の一カ所で見つかっているだけです。実験で調べてみると、日本産とボルネオ産のナンジャモンジャゴケの集団間には、意外なことにはほとんど遺伝的な違いがみられませんでした。遠く離れた集団の間で何が起きているのか詳しくはわかりませんが、得られた結果を素直に解釈するならば、ボルネオの孤立集団が他の集団から隔離されてからそれほど時間が経っていないこととなります。きっとかなり違っているだろうという私の予想とは反対の結果だったのですが、隔離分布する種の性質を考えるうえで、これもまたおもしろいことでした。

人の生活とともに

旧市街の町並みを歩いていると、道路と側溝との隙間にギンゴケやホソウリゴケといった群類の仲間が小さなマット状の群落をつくっているのをよく見かけます。土埃が自然にたまって薄い土壌となり、そこに苔が生えているのです。屈み込んで観察すると、少し盛り上がった群落は小さな植物体が密生して独特の光沢があり、まるでピロード生地のような美しさです。苔がまるで緑の芝生のようにも思えてきます。同じ群落の中でも光の加減で緑の彩りが微妙に異なりますから、実は芝生などよりもいっそう見事です。そんなマットを少しばかり失敬して、小さな植木鉢に移してミニチュアの人形などを配して楽しむ好事家の団体もあるほどです（日本マン盆栽協会。協会の公式サイト「マン盆栽パラダイス」をご覧ください）。ただ、ほんの小石でさえ小さな苔にとっては巨大な岩石ですから、そこだけ苔がうまく育たずにいびつな形になりがちで、盆栽に仕立てるほど姿の良いマットを探し出すにはなかなか骨が折れます。

私たちの身近な場所でも、よく探してみると至るところに苔は生えています。けれどもふだんこんな小さな植物のことなど気に留めることはありませんから、つい見過ごしてしまい

がちになります。散歩のついでに注意して探してみると案外苔は見つかるものなのです。苔を自分の手で育てるとなると、たとえけっこう手をかけたとしても途中で枯らして失敗することが多いのですが、苔が勝手に生えてくるときは、車で混雑する道路のそばや都会の植え込みの陰などこんなところにとり場所さえ、ちゃんと育っているのが不思議です。

ところで、コケ植物の中にはちょっと変わった場所ばかりを転々として生きている種類があります。知らないあいだに庭の片隅にやって来て、じょうご瓠箎形で鮮やかな薄緑色の胞子体が大きくなり始めてやつとその存在に気づく、ひょうたん蕨類ヒョウタンゴケもその一つです。ヒョウタンゴケは一年性植物なので、胞子を飛ばした後は枯れてしまいます。続けて何年か同じ場所に生えることもあります。いつの間にかいなくなってしまう。第1章の「戦略としての短い一生」で紹介したように、最適な環境を求めてあちらこちらとろうろつき回る「逃亡者」的な生き方をしていのです。実はこのヒョウタンゴケ、た焚き火跡を好んで生えることでも有名です。焚き火跡は、体の小さなコケ植物にとってみれば山火事跡のようなものですから、競争相手となる背の高い草もいませんし、木が燃えて豊富な栄養分も残されていますから、住処を転々としているヒョウタンゴケには最適な場所なのでしょう。最近出版された凶鑑には、太平洋戦争時、各地の空襲跡でこのヒョウタンゴケの大群落が出現したと書かれています。